雪の雫（仮）

紫苑　優

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
雪の雫（仮）

【Ｎコード】
Ｎ９４８５Ｙ

【作者名】
紫苑　優

【あらすじ】
いきなり「子どもが欲しい」と言い出した育て親と一緒に、義妹探しに街へ出たリースたち二人の義兄弟。色々あって出来た義妹とリースがその４年後、旅に出た。
血がつながっているわけでもないけれど、絆が確かにそこにはあった、３人の少年少女の物語。

プロローグ（前書き）

楽しく読んでくれると嬉しいなぁ。

プロローグ

花に彩られた冷たい石を、三人の人間がとり囲んでいた。

花を供えていた少女は、もっ花をつんでこようと、再び走り出す。

――もっとたくさんの花を。寂しくないようにしなきゃ。

が、行く手を阻まれた。

そして優しい声が響く。

「スノウ、もう大丈夫だから。そんなに花があっても義父さんが困るよ？」

（あ、これはリース義兄さんの声）

少女は顔を上げる。そこには、一番上の義兄の顔があった。

（兄さんはいつも優しい）

「うん・・・分かった」

スノウと言う名の少女は頷いてまた墓の前に戻る。

その様子を確認した青年、リースは、ずっと黙っている義弟を見る。

今の彼に出来ることは義弟や義妹を慰めることだけだった。

「アルフ、そんなに擦ると目元が赤くなる」

「いいさ、別に。すぐになおる」

それなりに乗り越えようとしているのだろう、と思うことにする。

＊＊＊

リースは魔法を使って、墓にゆっくりと文字を、義父の名を刻ん

でいく。
それは彼の義弟や義妹にとって、父が死んだということを改めて感じさせるものであった。
つっと涙が彼らの頬を伝った。

長い時間を掛けて文字を刻み終えたリースが立ちあがる。
「義父さん、今までありがとう」

（僕らを育ててくれたことに、感謝を）

＊＊＊

空が赤く染まる頃には、三人の姿は見えなくなっていた。
残されはのは、色とりどりの花たちのみ。
その真ん中に刻まれていた文字には、三人の育て親の名前が刻まれていた。

プロローグ（後書き）

プロローグを変えてしまいました。
ごめんなさい。
読んでくれてありがとう！

4年前の思い出［1］（前書き）

楽しく読んでくださいな。

4年前の思い出［1］

ここは、リテレイト王国という国にある古い森。
誰も寄り付かないその森では、三人の人間が一緒に暮らしている。
ある日の朝のことだ。

ゆっくりと意識が浮上した時、規則正しい息遣いが一人の少年の耳に入った。
床で布団に包まったままぼんやりした頭でそれを聞く。
（誰かここにいるのか）
少年はそう思う。緑の目と茶色の髪を持った彼の名は、リースといった。
リースはゆっくりと目を開いて天井を見つめていたが、すぐにその目を閉じる。今は横を向くのも面倒だった。もしも今、横に顔を向ければ、傍らにリースの育て親が座っているのが見えたはずだ。
再び眠り始めたこの少年をどうするべきか。

少し考えた後、育て親は決める。
（一時間くらい寝かせておくか）
子どもにはとことん甘い親であった。

「おい、リース。起きろ」
それからきっかり三十分後。リースの頭上から冷水が降ってきた。
水を掛けられ、リースは目を開ける。
（・・・・・・やっぱり冬の水は冷たい）
こういう事にも慣れてしまった。
しかし、しかめ面だ。冬の水の冷たさは伊達ではない。
さっきまでぼんやりとしていた頭は既にはっきりとしていた。

リースは頭上を見てみる。
そこには初老の男性が一人、誇らしげに立っていた。
髪には白いものが混じり始めているが、相変わらず元気である。
「レヴィン義父さん、おはよう」
「うむ」

いつもどおりの光景だ。
毎朝起きる時に水を掛けられるのも、隣で見下ろされながら重い体を起こすのも。
魔法で濡れた髪を乾かすと、身の震えはすぐにおさまった。

「相変わらず寝起きが悪いの、リース」
「・・・・・・うん」
「アルフはもう鍛錬をしているが」
「え、早いね」

今話題に上ったアルフという人物はリースの義弟である、アルフレッドである。
名前が長くて面倒なので、リースも彼の育て親も略されて呼ばれる。
本人は嫌がっていたりするのだが、二人とも気にしていない。

「おはよう、アルフ」

リースが呼びかけると、黒髪黒目の義弟は手を止めて振り向いた。
しぶしぶ、という感じだ。
素振りの邪魔をされたのが気にくわなかったらしい。

「お、兄貴。よく寝てたなぁ」

彼は一言そういって、また素振りをはじめようとするが、何を思ったか、ぴたりと動きを止めた。
何か考えている様子である。
何を考えているのか。
リースの疑問はすぐに解けた。
目の前に木刀が迫ってきていたのである。
何故アルフレッドがそんな暴挙に出たのか。

彼はリースに体術、剣術などで勝った事がない。
四歳分の歳の差もあるのでそれは当然のこととともいえるが、寝起きでも構わず”一本取りたい”のだろ　う、ということは容易に想像できる。
一歩間違えば大怪我ものである。しかしアルフレッドは自分よりも強いリースがよけきれないことなど考えてもいなかった。

（うわぁちょっと・・・・・・狙ってたんだ）

リースはは内心慌てて、迫ってきた木刀を避けた。
といっても、表情を押し殺しているので傍目には余裕そのものである。
そして、その事がアルフレッドの対抗心をさらに燃やすことになると気づいていなかったりする。
「・・・・・・ちっ」
「えっとね、義弟クン。寝起きの義兄さんに切りつけるのは反則だよ？」
「知るか」
最近の義弟はなんか反抗的だ、とリースはため息をついた。
「うむ、反抗期じゃの」

育て親は、なぜか嬉しそうだった。
どうやら、起こしたのはこれを避けさせるためだったらしい。
起きる前に斬りつけたら受け止められないかもしれない、とか囁いたのだろう。
相変わらず、悪趣味だ。
（まあいいや。結果的には避けられたから）
経過はきにせず、結果を見る。
リースはそう思い腰をあげる。外はのどかだ。

今日もいつもと変わらない日常が訪れてきていた。

＊＊＊

黙々と箸を運ぶ。
今日の朝食は静かだとリースは思った。
どうやらいつもの日常ではないのかもしれない、とも感じた。
（だって、ねぇ）
変わったことと言えば育て親が静かすぎることだ。
いつもはもっと騒々しい。
沈黙のなか、ふとリースの横で声があがる。
「リース兄、それ俺が食う」
彼の義弟が示したのは皿の上の肉である。
余程の成長期なのか。
「いや、僕のおかずなんだけどね、それ。
まあ止めても強奪するよね、ほら」
「さんきゅ」

・・・・・・

再び沈黙が戻ってきた。

と、育て親が朝食を食べ始めてから、初めて口を開いた。
かとおもえば、「わしは、もう一人子どもが欲しくなった」などとのたまう。

今、何を。
そう思ったのは、どうやらリースだけではなかったらしい。
リースがちらりと横を見ると、アルフレッドがぽかんと口を開けていた。
「「・・・・・・は？」」
何故かと理由を聞く。
「むさい男連中ばかりはもう飽き飽きなんだが」
「へえ」
アルフレッドは、まあそれもそうだと相槌を打つ。リースは義弟の適応力に驚いた。まだ疑問を持っているのは、どうやら自分だけらしい。しかし、高齢で、しかも相手がいない育て親に子どもなど作れるはずもないことは、見れば分かることだ。二人とも、それを忘れてはいないか。

「でも、どうするのさ？僕らみたいな捨て子を探して回るのか？」

捨て子なんてそういるわけじゃない。
そんな中で、どうやって見つけるのか。
（・・・・・・疑問だ）
リースはため息をついた。

4年前の思い出［1］（後書き）

のほほんですね。始めたばかりで言ってしまいますが、これって終わるんでしょうか。日常を書く物語って、永遠に続きそうな気がします。

［2］（前書き）

変更部分は育て親の名前を出したことと、サブタイトルです。
中身はそんなに変わってません。
ところで、楽しく読んでいますか？楽しむというのは大事なことです。

［2］

捨て子を探して回るのか、というリースの問いをレヴィンは否定し、こう答えた。
「これからするのは誘拐だ」と。
少しの沈黙の後に、内容を理解したアルフレッドはぼそっと呟いた。
「・・・・・・犯罪だろ？」
語尾が疑問形になっているのは育て親の言葉が自信満々だったせいである。
じっくり考えて意味を理解したリースも頷く。
「普通に考えてだめだよね・・・・・・でも僕たちの義父さんは常識人じゃないからね」
微妙に哀れみの混じった視線で見られた育て親は、少しへこんだ。
慌てて反論する。
「犯罪ではあるが、決してこれは犯罪ではない」
「結局のところは犯罪だろ」
ぶつぶつと言っているアルフを華麗にスルーし、育て親は話し出す。
「わしは昔教えただろう、この国リテレイトでは法に背く者が大勢いる。
法が意味を成さない、そんな所だ。どの面でそれが起きているのかというと、奴隷売買だ。表ざたには決してならないが、貴族などは奴隷を飼っている。
・・・・・・奴隷には異形の者たちが多くてな。この国で街に出たらたちまち遠ざけられるだろう。他の国なら大丈夫なのだが。こ

んなことを黙認しているのはリテレイトくらいだ。
生まれてすぐに親によって売られ、この環境でしか生きられないことを”刷り込み”される。存在そのものを消された者なのだ、奴隷は。そんな彼らをさらったところで、犯罪になると思うか？」

「・・・・・・ならないな、多分」
「うん、そうだね」

そう問われると、それは悪いことではないのではないか。
聞いていたアルフレッドとリースはそう思った。

［2］（後書き）

こういう内容は自然に暗くなります。
読んでくれてありがとう。

［3］（前書き）

楽しく読んで・・・・・・
もう聞き飽きましたか？

まあ、楽しく読んでください。

【3】

「じゃあ、行くかの」
「うん」「おう」
次の日、三人は少ない荷物を肩にかけて、家を出た。
街へは衣服や保存食料の買出しでごくたまにしか行かない。アルフレッドはどことなく嬉しそうだっ　た。

歩きながら、リースは途中何回もレヴィンに聞く。
「大丈夫？辛くない？」
「大丈夫に決まってる。誰だと思っておる」
そう話していると、アルフレッドが口を挟んだ。
「誰って、爺さんに決まってるだろ」
事実そうなのだが、面と向かって言われると嫌なものである。

「・・・・・・アルフお前、もう一度鍛えなおそうかの」
「――えっ、　うわ、ごめんってぇぇ」
焦って謝るアルフレッドだが、時既に遅し。
バチンという音が鳴った。

「痛って・・・・・・」
「当然の報いだ」
アルフレッドは僅かに赤くなった額を押えて蹲る。
（やっぱり義父さんのでこピンって最強？）
呻くアルフレッドを見ながらリースはのんきにそんなことを考えていた。

「おい、兄貴。助けろよ！」
森に叫び声が響く。それに驚いたのか、鳥が数羽木から飛び立っ

た。

＊＊＊

夜まで歩き続け、結局その日は野宿をすることになった。

場所を決め、「さて、薪を集めてくるか」と腰を上げかけた育て親をリースとアルフレッドは止める。

「いいよ。薪はアルフが集めに行くし、調理は僕がする。義父さんは座って待ってて」

「よし、兄貴。爺さんを見張ってろよ！」

「見張るって・・・・・・」

そう言い残して急ぎ足で去ったアルフレッドに、リースはため息をついて、調理を始めた。

（アルフとリース。いつの間にか、この子たちも大きくなったものだ）

彼らの育て親は静かに笑う。

（多分、今日歩いてわしが体力をかなり使っていたことも分かっているのだろう。気配りも出来るようになったのだな）

そんなことを考えていると、リースがこちらを見ているのに気づいた。いつから見ていたのだろうか。少し疑問に思った。

「・・・・・・大丈夫？」

「大丈夫だ。心配するな」

そう聞かれて、とっさに言った肯定の言葉に短く「そう」と答えたリースはまた手元に注意を向けた。　この間から肉を捌かせているがまだ慣れていないのか、少し手つきが荒い。

しかし一生懸命だ。

仕方のないことであるが、リースを見ているとあいつを思い出してしまう。

リース。本当にお前は、あいつに。

「・・・・・・似ているよ」

ぽつんと呟いた言葉は、空気を少し震わせただけだった。

［3］（後書き）

新キャラ登場の予感。
読んでくれてありがとう。

［4］（前書き）

楽しく読んでくれると嬉しいな。

［4］

リースが肉を裁き終えたとき、アルフレッドが帰ってきた。
薪を集めてくるには少し遅かった、と思ったリースは声を掛けようとしたが、あることに気づいた。
（何か背負ってる）
到底薪とは思えなかった。リースとレヴィンが、それは何かと聞くと、人だと答えられる。
一人で倒れていたそうで、持ち物も食べ物以外はあったそうだ。どうやらこの人間は、空腹で倒れたらしい。
「とりあえず、料理を作るか」
義父のことばにリースは我に返って調理を再開した。
アルフレッドは思いがけず拾ってしまった物をそのまま置いておくのも気がひけたので、毛布を掛けておいた。
後は料理を待つばかり。
すっかり暗くなった森の中で、食べ物のにおいが漂い始める。

＊＊＊

「いやぁ、生きててよかったっす！」
リースの作ったシチューをがつがつと食べている男。それはつい先程、アルフレッドが拾ってきた人間である。彼の名前はカルナといった。
思っていたとおり、空腹で倒れていたらしい。
「いや、しっかし俺の名前って女っぽいんですか。嫌なんですけど」
「・・・・・・お前一体何人分食う気だ」
「アルフ、よくこんなの拾ってきたね」
「兄貴、仕方ないだろ。こんなのって分かってたら拾ってない」
「まあ、そうだね」

兄弟のこの会話に、拾われた本人は冷や汗をかいた。
「ちょ、ちょっとお兄さん方。怖い話はしないでくださいよ。全員分は食べませんから、ね？あ、おかわりください」
食い気に負けて結局おかわりをするカルナ。
「・・・・・・あのな。遠慮と言う言葉を知ってるか？」
「へ？何すか、それ」
アルフレッドの忍耐力はもうすぐ切れそうだった。リースはカルナの言動に笑いながら、
（いつもの数倍はうるさいけど、楽しいものだね）
と思った。
リースが隣のレヴィンを見ると、彼も楽しそうにアルフレッドとカルナのやり取りを見ていた。こうして食事は始まり、同時にカルナの話も始まる。

カルナは郵便配達員だった。毎日人に郵便物を届けることは楽しいらしく、たくさんの手紙を届けるうちに、信用されるようになった。そして今回重要な手紙を届けることになったらしい。
「でも・・・・・・そんな大事なこと僕たちに言っていいんですか？」
リースが不思議そうに聞くと、カルナはしまった、と言う顔をした。今気づいたようだ。
「ま、まあ言ってしまったものは仕方ないでしょ！それに、俺を助けてくれる人が悪い人のはずがありません！」
苦しい言い訳は余計にカルナの心を悲しくさせただけだった。が、空元気を出して言う。
「ともかく、俺はこの森の奥に住む人に手紙を渡せってトゥルイさんに頼まれたんです！」

「・・・・・・トゥルイだと？」
レヴィンがその言葉に反応した。
「宛名は誰だ？」
「えっと・・・・・・レヴィンさんっすね」
リースとアルフレッドは顔を見合わせた。
「義父さん、そんな知り合いがいたんだ。知らなかった」
そう言うリースに、レヴィンは最後に会ったのは十三年前だからな、といって苦笑する。

状態をようやく理解したカルナは、ぽんと手を打った。
「あ、もしかしてレヴィンさんですか。はい、これ手紙です」
丁度よかった、とにこにこして手紙を手渡す。
レヴィンは手紙をすぐに開封し中を見る。リースとアルフレッドはそれを覗き込んだ。

ついでにカルナも見ようとしたので、それを必死に阻止したのはここだけの話である。

［4］（後書き）

育て親の名前って、何か若そうな印象があります。
個人的にカルナの性格は大好きです。

読んでくれてありがとう。

［5］（前書き）

今回はレヴィン宛の手紙から始まります。
楽しく読んでください。

［5］

拝啓

レヴィン、元気か？まあ俺は元気だ。毎日楽しくやってる。

お前が森に住みついて十三年。その間に街に来たのは十回だぞ。
しかも俺に会いに来ないなんて。酷くないか？
まあ元気らしいから、そこは気にしないが。
すぐに会いたい。話したいことがある。重要なことだから今は言えないのだが。
この手紙がお前の手に渡ることを祈るよ。
また会おう。

俺は今ギルドマスターをしてるから、ギルドに行けば会えるはずだ。

追伸：リースとアルフレッドも連れて来い。
十六歳と十二歳だろ？会って話してみたい。
どんな成長をしてるか、楽しみだ。

敬具　トゥルイ

＊＊＊

（くそ、トゥルイめ。街に行ってるってこと、なんで知ってるんだか。教えたことは一度もないっていうのに。後をつけてるのか？）
知らない間にストーカーみたいなことをされていたのか、とレヴィンの背に寒気が走る。

リースとアルフレッドはこんな人に会った事あったっけ、と首をかしげていた。
こんな風に、手紙を読んだ三人の反応は様々であった。
一方、一人だけ仲間はずれにされたカルナは、隅で落ち込んでいた。
「なんで俺だけ仲間はずれなんですか。見たいですよ、俺だって。酷くないですか」
延々と言い続けるので、アルフレッドがうるさいと怒鳴ると、独り言は言わなくなったが、その夜はずっと膝を抱えていた。
可哀想だ、と思った人間はいなかったらしい。

［5］（後書き）

カルナの性格は書いてて本当に笑えます。

読んでくれてありがとう。

［6］（前書き）

楽しく読んでくださいな。

【6】

「街だあぁぁ」
リースの横でアルフレッドが叫んでいる。
リテレイト最大の街、ウェントリー。今、四人の耳には多くの人々の喧騒が聞こえていた。
「やっと帰って来たっす・・・・・・でも皆さん、体力あるんっすね」
途中で疲れて引きずられていたカルナが言う。
「単なる運動不足じゃないかな・・・・・・」
リースが呟くが、幸いそれがカルナの耳に入ることはなかったようだった。

街に足を踏み入れる。アルフレッドはきらきらの笑顔で散策を開始していた。
既にリースたちの事が眼中にないらしい。
レヴィンとカルナに待っているように言って、リースはアルフレッドを連れ出そうとした。
「アルフ、行こうか」
声を掛けても返事がない。聞こえているのか、いないのか。
「行くよ」
仕方なく、連行していった。
「何でだよ、いいだろ」
アルフレッドは、引きずられながら文句を言っていたが、それを聞かないのがリースである。

リースがアルフレッドを連れ出しているその時、レヴィンとカル

ナは人気のないところで待っていた、はずだった。
（何でこんなことになっている）
子どもの波に飲み込まれそうになりながら、レヴィンは悪態をついていた。それを作り出した原因は子どもたちを追い掛け回している。

「カルナが今何歳か知ってる―？」
「知らな―い。教えて―」
「お前ら俺の年齢言うなぁぁ！」
「今ね―カルナは三十七なんだよ―」
「だから言うなって！」
どうやら年齢という弱みを握られていたらしい。カルナは、息切れしたのか立ち止まった。
その姿に、驚いたレヴィンが声をかける。
「お前三十七だったのか。心配するな、結構若く見えるぞ」
「・・・・・・レヴィンさん、慰めになってません」
悲しそうに頭を下げるカルナ。
レヴィンはふと思いついた疑問を彼に言った。
「そんな元気があったならもっと速く歩けたと思うのだが？」
「これはいざというときに出る馬鹿力って奴ですよ。
・・・・・・ってちょっとレヴィンさん、何してるんですか。放してくださいって」
ふいに襟首をつかまれたカルナ。何故それをされたのか分からず、とりあえず脱出を試みる。が、
「面倒だから目的地に着くまで放さん」
「そんなぁ」
どうやら子どもたちを追い掛け回したのがいけなかったらしい、と気づき、カルナは肩を落とし抵抗をやめた。
彼の周りでは、相変わらず子どもたちが駆け回っている。

＊＊＊

しばらくするとリースの姿が見えてきたので、レヴィンはカルナを引きずってそこへ行く。

「アルフはどうした」

「連行してきたよ。・・・・・・本当に街が好きだね。ところで、カルナさんも引きずられてるの」

「面倒だからこのまま行くぞ」

「あ、そっちの方が早いかもね」

その日、街では二人の男が人を引きずって歩く光景が見られたとか。

［6］（後書き）

今回は会話が多くなりました。
急いで書いたので誤字が（いつもより）多いかもしれません。ご了承ください。
読んでくれてありがとうございます。

［7］（前書き）

短くてすみません。
今回、登場人物が一人、増えました。
楽しく読んでくださいね。

【7】

レヴィンに引き摺られながら道案内をするという、難易度の高いことをやってのけたカルナが働いているところは、こぢんまりとした建物だった。
中に入ると、かなり殺風景だということが分かる。

一部屋のみのそこには、机がおいてあり、人が一人、足を組んで座っていた。
レヴィンの手からやっと解放されたカルナは、その人物につかつかと歩み寄り、ビシッと敬礼する。
「組長、ただいま戻ってきました！」
その姿は、先程までのだらだらした様子とは全く違っている。
”組長”と呼ばれる人物は、苛々とした声をあげた。
「ああ、もう！”組長”はやめてって言ってるでしょ！それよりレヴィンはどこよ！連れてきなさい！」
カルナの後からぞろぞろとついて来た三人は顔を見合わせた。
アルフレッドはレヴィンに尋ねる。
「爺さん、知り合いか？」
レヴィンは首をかしげる。
「・・・・・・いや、見覚えがないが」
話していると、”組長”は金の目をすっと細めて喚いた。

「もうっあたしよあ・た・し！ルクシーナよ！」
その言葉にレヴィンは目を見開いた。
「・・・・・・ん？ルクシーナか」
「うわぁ・・・・・・やっと思い出したのね。年取ったからボケたのかと思ったわ」

何気に毒舌なカルナの上司(ルクシーナというらしい)は笑った。
「久しぶりね。また会えて嬉しいわ」

(実は義父さんって意外に知り合いが多いのかな。森にいたときは全然訪ねてこなかったけど)
(組長とも仲がよくて、その上トゥルイさんの知り合いなんて・・・・・・大物だったんですかレヴィンさん!)
リースとカルナはそう思いながら親しげに話す二人を見ていたらしい。

［7］（後書き）

ルクシーナが”組長”と呼ばれる理由は後ほど出てきます。多分。

・・・・・よく考えたら彼女は女性の登場人物第一号でした。

これまで男だけだったんですね。びっくり。

読んでくれたことに感謝の言葉を。

［8］（前書き）

どうぞ楽しくお読みください。

［8］

話を聞くと、どうやらルクシーナは手紙の主、トゥルイの娘らしい。

「どうも。ルクシーナよ。リースにアルフレッドね？」

短い金髪を手で梳きながら彼女は問う。

「ええ。僕がリース。こっちはアルフレッドです。名前が長いから皆アルフって呼んでます。

よろしくお願いします」

ぺこりと頭を下げると、思いのほか驚かれた。

「・・・・・？どうかしました？」

「いえ。礼儀正しいなと思って。普通はアルフの反応が普通なのよ？」

横を見るように促されて、リースが横を向くと、アルフレッドがぼうっと突っ立っていた。

頭を下げる気配がない。

「ああ、あれだな。アルフはずっと森の中にいたから、きっと女に耐性がないんだ。

リースは・・・・・ただ単に鈍いだけか」

「何気に失礼だよ、それ」

レヴィンがため息をついて説明すると、リースは苦笑した。

まあ鈍いのは事実なので（よくアルフレッドに言われるのだ）そう言われても仕方ないことではある。

「では、父様のところへ行きましょうか。ここはギルドと連結しているから、行き来は楽なのよ」

そういって歩き始めたルクシーナの背中を、黙って見ていたカルナ。
暗い声で、小さく呟く。
「俺のこと、完全に忘れてませんか・・・・・・？」
この言葉を聞いたのはリースだけだった。
大事な仕事を任されたのに褒めてもらえないのが、悲しいらしい。
肩を落としていたので、リースは無言でぽんぽんと、カルナの背中をたたいてやった。
（カルナさん、意外に影薄かったね。今まで忘れてたよ。
本当に優秀なのかな・・・・・？まあ、頑張れ）
（リースさん、俺のこと覚えててくれていたんですか・・・・・・！感激っす！！）

お互いの考えが食い違っているのに、カルナは気づいていない。
彼は案外幸せな人間である。何故なら、悲しみは既に吹き飛んでいるからだ。

嬉しさに目をうるうるさせているカルナの視線に気づかないリースは、アルフレッドをつつく。
アルフレッドはまだぼうっとしていた。

「え・・・・・と。もしもし、アルフ君？」
気づく様子は全くない。
リースは、しばらく考え、結論を出す。
「うん、面倒だけどまた引っ張っていかなきゃいけないわけだ」
リースは、再びアルフレッドを引き摺ってルクシーナについていった。

［8］（後書き）

森に住んでいたせいか、
アルフレッドは女に弱くて、逆にリースは鈍いです。
男だけの暮らしでしたからね・・・・・・。仕方ないともいえますが。

ところで、カルナの人気が非常に高いです。
この子は一応サブキャラですよ。
サブにしてはかなり濃いですが・・・。思い切って昇格させようかな。
メインの登場人物も大事にしてやってください。

読んでくれたあなた様に、感謝の言葉を。

あ、あと言い忘れていたことが。
アドバイスとかお願いします。
今の自分の文章力てどのくらいなんでしょう・・・・・・？

［9］（前書き）

レビューをされてアクセス数が跳ね上がりました。
ビックリです。

楽しく読んでくれると嬉しいな。

[9]

「うっわレヴィン久しぶりだな何年ぶりだ？」
「お前息継ぎせずに言うほど嬉しいのか・・・・・・放せ、気持ち悪い」
これはギルドに到着した直後の風景である。

レヴィンに抱きついている若者が誰か分からず、初めリースは戸惑った。
アルフレッドは例の如く未だ放心状態である。
ルクシーナは呆れたようにため息をついた。
「あれが、あたしの父様。
・・・・・・人前でこんなことをするのはやめて欲しいわ、もう」
「え？」
リースはトゥルイと思われる若者と、ルクシーナを見比べる。
齢はそう大差はなかった。
親子というより、兄妹といった方が正しいのではないか、と思える。
（義父さんと同年代だと思ったんだけど）
「割と義父さんと齢が離れてますね」
そう言うと、ルクシーナは首を傾げた。
「え？父様はレヴィンと同年代よ、精神年齢が異常に低いけどね」
「・・・・・・本当ですか、それ」
「信じられないかもしれないけど、そうなの」

魔力を持つ人間は、魔力を持たない人間と齢の取り方が違う。
魔力を持たない人間は、肉体の老衰によって死を迎える。
それに対し、魔力を持つ人間は、体内の魔法力が増えることによって成長し、減って無くなっていくことによって老衰する。そして、

体に魔力が無くなった時、死を迎える。
勿論、自分の体が何時まで元気かなんて分からないし、自分の持つ魔力が何時無くなるのか、予測は出来ない。
聞くと、トゥルイは魔法が使える側の人間らしくまだ魔法量が少なくなる気配も無いので外見的にはまだまだ若いらしい。
実質は、レヴィンと同年代なのだから驚きである。

「すごいですね・・・・・・義父さんと同じ年齢であんなに無邪気なのはすごいです」
「そうよねぇ。・・・・・・って父様を少し馬鹿にしてない？」
「いえ。馬鹿にしてはいませんがやっぱり精神年齢が低いとは思いますね」
「それって結局馬鹿にしてるわ」
そういうルクシーナに、リースは笑って言う。
その笑い方が黒くみえたのは、きっとルクシーナの気のせいだろう。
「そうかもしれないですね」
「どっちなのよ！リースって案外性格が悪いのね」

＊＊＊

「そういえばトゥルイ、お前俺が街にきた回数を何で知ってるんだ？」
「いや、知ってるも何も俺は門に感知魔法をこっそり設置してるからね。来た事くらいすぐに分かる　よ。
でもなんで家に来ないのさ。心配だったから後をつけてたけど俺の家に寄る気配もないし」
「俺はお前のそういうところが嫌なんだっ」
「あはは。でもそれが僕だからなぁ。仕方ないさ。
・・・・・・ところで、さっきから気になってるんだけど。

あの茶髪の男の子がリース？」
「そうだ。で、リースが担いでる奴がアルフ」
「ふうん・・・・・さすがに一緒だと、似てる風に見えるな」
トゥルイの言葉にレヴィンは苦笑する。
「似てる風に見えるんじゃない。本当に似てるんだよ、あいつらは」

［9］（後書き）

なんか進みそうな予感が。
今回はリースが少し性格が悪いです。
本人は純粋に思ったままを言っているだけですが。
トゥルイは、文面（手紙を書いた時仕事モードだったようです。というか、仕事のときと普段のときでテンションが違います）と実際のギャップがありすぎです。それなりに笑えますが。

アドバイス・感想などをお待ちしています。
読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

［１０］（前書き）

えっと・・・・・・。
前書きは大切ですね。
楽しく読んでくださいな。

［10］

「あーあ、レヴィンも寝ちゃったなぁ」
酔ったトゥルイの声が遠くに聞こえる。
しかし、この場所はギルドではない。

＊＊＊

――たくさんの木々に囲まれていた。
森だ。
いつの間に、此処に来たのか。
まわりを見わたす。そこには、たくさんの人がいた。
ただ、違うのはそれが一般人ではなく、凶悪な顔をした犯罪者たち、だということである。

ああ、これは――。
いつか見た、光景。
何故またこんなことが起こっている？
降り注ぐ矢。血に濡れた剣を振り回して対抗する俺。
この結末は嫌なものだった。

そこで気づいた。

・・・・・いや、待て。
何故俺は”結末が嫌なものだった”と分かるのだろうか。
肝心の結末は思い出せないというのに。
そう思っていると、不意に背の一部に鋭い痛みを感じた。
矢が刺さったらしい。

ゆっくりと、体が倒れていく。
この後、俺は・・・・・・
俺はどうなる？

分からない。
記憶に靄がかかっているようだ。
思い出したい。
いや、思い出さなければいけない。
何故かそう思った。
「どうなるんだろうな、俺は・・・・・・」
そう言っても思い出すわけではないのに、言ったら何かが分かる気がした。
答えを求めていたわけではなかった。
しかし、呟くと、声がした。いや、この場合、返答か。

「あなたは助かる。生きてね」

その声で、ふと。
蘇った、記憶。
いけない。
このまま、奴を戦わせては、いけない。
「リース、やめろ！！」

＊＊＊

レヴィンがはっと目を覚ましたとき、初めに見たのは心配そうなリースの顔だった。
「義父さん、大丈夫？僕の名前を呼んでいたみたいだけど」
その言葉で、レヴィンは思い出す。
「そうか、これは夢だったか」
ほっと息をつく義父を、リースは心配そうに見たが、何も言わずに口を閉じた。
勿論、レヴィンがうなされているとき、何故自分の名前を呼んだのか、という疑問も深くは聞かなかった。
「何がどうなっている？此処はどこだ？」
状況が読めない義父に、リースは夜に起こったことを話した。

あの後、
「レヴィンも来たことだし、今日は宴だ――！」
何故かそう叫んだトゥルイ。
それに、その場にいた冒険者たちは、嬉しそうに同意をした。
「よっしゃ宴だ！」
「ところでレヴィンって誰だ？」
「知るか！でもそいつのおかげで騒げるんだ、感謝だなぁ！」
「何っお前知らないのか、レヴィンさんを！」
「あ？誰だ、それ」
「知る人ぞ知る、伝説の人間だぞ！」
「えっマジですか、レヴィンさんそんなに有名なんですか！」
「カルナ、お前も知らなかったのか。知っていて損は無いぜ、そんな人だ、レヴィンさんは！」
「そんな凄い人なんすか？」
「仕事バージョンでないトゥルイさんと一緒にいても全然平気という伝説が残っている」

「マジですかっ！？」
どうやらレヴィンは生きる伝説になっていたらしい。
人気者だなぁとその光景を眺めているリースの横では、ルクシーナが肩をすくめていた。
（その伝説を広めたのって、あたしなんだよね～なんか迷惑かけたかなぁ）
でも本当のことだし、と勝手に自分の中で結論付けたルクシーナは、喧騒の中に混じっていった。
一人、（肩に担がれた人間を合わせると二人だ）で取り残されたリースは、これから何をしようかと、途方にくれた。

途中レヴィンがリースの所へ来たのだが、「適当に宿を取って寝ろ」といったので、リースは大人しくアルフレッドを連れて近場の宿をとることにした。
が、心配になったので、アルフレッドを置いてきた後、もう一度ギルドに戻ってみると、レヴィンは酒に負けて寝ていたので、連れて帰ってきた、というわけだ。

「なるほど。そういうわけか」
「うん。
・・・・・・でも、トゥルイさんって酒に強いよね。
僕が義父さんを連れ戻しに来たとき、一人だけ酔い潰れてなくて、なんか高笑いしてた」
「・・・・・・ああ、奴は酒豪なんだ」
「ふぅん、成る程。
まあ、そういうことだね。はい、水」
「ああ、ありがとう」
リースから水を受け取ったレヴィンは、それを一気に飲み干した。

因みに、深夜のギルドで不気味な笑い声が響き渡っており、近所の住民が騒音の被害届を提出していたのは余談である。

［１０］（後書き）

”深夜の不気味な笑い声”はとトゥルイです。

・・・・・・怖っ！！

そういえば、少しずつ核心に迫っていっているような気がします。

読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

［１１］（前書き）

楽しく読んでくださいな。

［１１］

軽く二日酔いのようだが、元気になったレヴィン。担がれて宿に入ったアルフレッドもどうやら復活したようなので（本人曰く、「魂が抜けていた」らしい）一旦ギルドに戻ることになった。
健全だったのはリースだけ？という心の声は封印しておいて欲しい。

＊＊＊

「うわ、すごい」
何が凄いか。
それは今のギルドの状況を見ると分かる。
「ここ、仕事場ですよ・・・・・・？」
そんなリースの呆れ声も、冒険者たちには届かない。

酒臭いギルドでは、皆が未だに酔い潰れている、とリースは思ったのだが、それは少し違った。
中身の無い酒樽は十を軽くこえる。が、床に転がるそれらの奥の所で、酔い潰れていない人間が一人。
彼はギルドにある机の一つに鎮座していた。
レヴィンが声をかける。
「トゥルイ、一回にそんなに飲んでいたら、金がなくなるぞ」
そんな忠告に対する返答は、リースたちが想像していたのとは全く違った。
トゥルイと付き合いが長いレヴィンにもそれは意外なものだった。
「大丈夫だから。
・・・・・・金なんて自分で作れるようになったし」
そういって無造作に近くの石ころを拾うと（何故そこに石ころが

あるのかは分からないが）、おそらく魔法だろう、一瞬にして金にかえて見せた。

「・・・・・」
「犯罪だよな」
「ねえアルフ、こんなやりとりを最近したような気がするのは僕の気のせいかな」
「いや、気のせいじゃない」
「義父さんも、犯罪しよう（犯罪にならない誘拐だが）って言ってるしね」
今更白い目で見られるレヴィンとトゥルイ。
慌てて反論するレヴィン。
「犯罪にならない犯罪だからいいんだ。それにリースもアルフもいいって言っただろうがっ」
それに対して、トゥルイは焦る様子も見せず（というより、気にしてないといった方が正しい）言った。
「僕は別にどうでもいいけど。それに、ばれてない犯罪は犯罪とはいわないよ」
「いや、僕たち三人にばれてますから」
「でも君たちがお役所に言わなきゃ問題ないだろ？」
「・・・・・・まぁそうですが」
「じゃあ問題ないよね？」
トゥルイの勢いに飲まれつつあるリースたちである。

＊＊＊

彼らがそんな話をしている中、ギルドの前では少年が立っていた。
入りにくそうに中の様子を伺っている。
何故その行動をしているかというと、

それは例によって酔い潰れた冒険者たちが多数転がっているせいである。
このギルドという建物は、どういうわけかガラス張りなのだ。
つまり、中の様子が簡単に見えてしまっている。
というわけで、今、ギルドの前に立つ少年は途方にくれていた。

［１１］（後書き）

「ばれない犯罪は犯罪と言わない」

・・・・・・まぁ確かにそうなんですが、トゥルイさん、ばれたら捕まりまよ・・・・・・？

内心そう思いますが、そこは気にせず。

正体不明の少年が出てきました。案外彼は、ばれかけている（何っ！？）謎のキーになる可能性があります。

いや、可能性なのでまだ分かりませんが。

普通のサブキャラになることもある、と思います。

感想・アドバイスなどをくれると幸いです。

読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

［12］（前書き）

この話は少し長めです。

楽しく読んでくださいな。

［12］

リースが助けを求めて目を彷徨わせば、外に少年がいるのが目に入る。
「あれ誰かな」
助け舟を出してくれないか、という願いをこめて見れば、その少年も視線を感じたのか、リースの方を見た。
と思えば、嬉しそうに中に入ってくる。
どうやら見つけてくれるのを待っていたらしい。
「入ってもいいですか～？」
にこにこしながらそう言う少年に、
「あー・・・・・・僕に聞かないで」
と軽く流したリース。トゥルイも気づいていたようで、「入っていいぞー」と呑気に言っている。
「誰、あれ」
アルフレッドは今気づいたらしい。
「さあ」
レヴィンも分からない、と首を傾げたが、しばらくして思いついたように、
「ああ、依頼人か」
と言う。
「正解。流石」
その答えにトゥルイが嬉しそうに笑った。

＊＊＊

「僕、家の主人に頼まれて。害獣の退治をしてください！このままだと、森がなくなってしまいます！」
少年の第一声はそれだった。

「それはどういう・・・・・・・？」
少年は話し始めた。
最近、もともとこの国にはいなかった生物が、増えているらしい。
他の国に生息している、いわば外来種。それが、最近急増している、という。
「そいつらは、木を食べるんです」
「木を・・・・・・？」
「その上、そいつらが食べて出した排泄物は、地を汚し、浄化するのに何年もかかる」
口を挟んだトゥルイに、レヴィンが聞く。
「そんな生き物がいたのか？」
「・・・・・・ああ、レヴィンは知らなかったんだね。そいつらがここに来たのはつい最近のことなんだ」

「でも、」
一瞬の沈黙の後に、リースは言った。それはレヴィンもアルフレッドも思っていたことである。
「この状態で、行ける人っていませんよね」
周りは見ての通りの惨状である。
が、そこでトゥルイが不敵の笑みを浮かべた。
(嫌な予感しかしないんだけど)
そんなリースの思いは、的中する。
「行ける人？いるじゃないか、此処に」
「「え？」」
疑問の声がハモる兄弟。（リースとアルフレッド）
二人に下された言葉は、
「お前ら、依頼に行って来い」
というものだった。

＊＊＊

一応、抵抗はしたリースだったが、逃げられないことは分かっているので、諦めなければいけなかった。しかし、アルフレッドは嬉しそうである。

「アルフ、戦い好きだもんね」

悲しそうに呟くリースに、レヴィンは慰めのような言葉を言った。

「トゥルイから逃げられた奴なんていないさ、リース」

（会ってまだ短いけど、僕にもそれは分かる）

それは彼（リース）を一層落ち込ませただけだった。

「まずお前らは登録をしなきゃいけないからな。では、説明をしよう」

トゥルイが真面目な顔になり、言う。

「まず、登録をする人間が先ず始めにすることは、自分の血を採ること」

「は！？」「・・・・・・そんな事するんだ」

ありえない、という顔をした二人にトゥルイは顔をしかめた。

「嫌そうな顔をするな。これには、それなりに理由がある。

血と言うものには、自分の情報が全て刻まれている。何故なら、それは常に体中を駆け巡っているからだ。健康状態、体内の魔法量、全てにおいて、分からないことはない。

人間の情報を知りたかったら、血を見ろ、と言われる位だ」

「・・・・・・・・・・・・・・・なら仕方ないね」

リースは指を少し切って、血を出した。アルフレッドもそれに習う。

「よし。次だ」

見届けたトゥルイは、次の工程を伝える。

「その血を、この石――血吸石に吸わせろ」

言われるがままに、二人はそれぞれ渡された石に、血を吸わせる。

あっという間に血は石に吸い込まれ、あとも無くなった。
リースが感心したように
「へえ、これすごいね」
と呟いた。
「よし。これで、情報は石に組み込まれた。後は・・・・・・っと」
トゥルイは魔法で石を変形させると、「ほれ」と投げてよこした。
受け取った石は、輪の形に変わっていた。
「ギルドの奴は、腕輪にして肌身離さず持つことにしている」
「へえ・・・ところで横にあいてる穴は何？八つあるけど」
「ああ、それはランクが上がるごとに石が埋め込まれるんだ」
おまえらは始めたばかりだから一つだけ埋め込まれる、とトゥルイは言い、赤の石を二人に渡した。
「ランクが上がるごとに、渡される石も違うからなーまぁ早く全部集めろ」
始めの石から順に、赤→黄→緑→水色→紫→黒→白→透明、と変わっていくらしい。
「登録は終わりだ。依頼に行って来い」
「了解」「おっす！」
「あ、トゥルイ。一応奴らについて行くから、何かあったら連絡をくれ」
レヴィンも一緒についていき、後には依頼主の少年とトゥルイだけが残った。

三人の気配が完全に消えたことを確認すると、少年が言った。
「彼らがこれを簡単に出来たら、例の件も彼らに任せる、と主からの伝言です」
先程までの幼さは消えている。少年は別人のように冷静だった。
「演技が上手ですね、貴方は」
そう返すトゥルイの口調もいつものものとは違っている。

「まあ・・・・・気にせずとも良いでしょう。彼らは必ずやりますよ」

若きギルドマスターは、そう言って爽やかに笑った。

［12］（後書き）

今回は”ギルド登録”についてでした。展開が少し早いので近いうちに訂正を行いたいと思います。

不自然なところがあったら、お知らせしてくれると幸いです。

これを読んでくれたあなたに感謝の言葉を。

［13］（前書き）

ＳＩＤＥルクシーナですよ―

楽しく読んでくださいね―

【13】

・・・・・・・・・・頭が痛い。なんだ、この痛みは。
そう思ったところで目が覚めた。
「痛ったいなぁ・・・・・・・」
そういいつつ体を起こすあたしの近くには、父親がいた。
「ルクシーナ、起きたか」
そこで、気づく。
「そっか、あたし二日酔いなのね」

昨日の宴は特にひどかった。父親が酔ってしまうくらいだからきっとものすごい量を消費したのだろう。
レヴィンは大丈夫だろうか。
酒には弱かったはず。
「ねえ、レヴィンたちはどこ？」
「任務に行かせた」
「ふぅん・・・・・・って何で！？」
あたしは驚いた。だってリースとアルフレッドはギルド登録なんてしていない。
「さっき登録させたんだ」
そう言って笑う父親に尋ねる。
「依頼が来たの？」
「ああ、この少年が依頼をしてきたんだ」
「え？あ、この人？」
はっきり言って影が薄かったから気づかなかった。というか父親の存在がインパクトありすぎで分からなかった。
少年は、リースと同じ歳くらいだろうか。
「どうも」

と軽く会釈をすると、少年も静かに頭を下げた。
うん、この子静かだなぁ。でもリースとはなんか違う静かさよね。
などと余計なことを考えながら・・・・・・ってそんなことを考えている場合じゃない！
「リースとアルフレッドって強いの？大丈夫なの？」
気になっていたことを尋ねると父親はにやりと笑った。
「強いよ、あいつらは」
その言い方が信頼の感情を含んでいたので、一瞬見直した。
のだけれど。
「でも戦いぶりを見たいからな。もう大分離れたから後をつけるとするか♪」

・・・・・・ああ、いつも通りだな、この人は。

「そうね。あたし、なんか疲労が押し寄せてきたわ」
「ん？なら寝とけ。じゃあ俺はしばらくここを空けるぞ」
「はいはい、お好きなように」

嬉しそうに出て行った父親と、何故かそれについていった依頼主の少年を見送る。
「なんであの子ついていったのかしら・・・・・・」
と少し疑問に思ったが、今はここを片付けるのが優先だと思う。
しかし残念ながら、冒険者たちは全員撃沈なので一人でしなければいけないようだ。

「寝てられないわ、これ」

あたしは一人、そう呟きながら片づけをはじめた。

［13］（後書き）

今回は特に駄文ですが、お許しください。

これを読んでくれたあなたに、感謝の言葉を。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9485y/

雪の雫（仮）

2012年1月14日11時47分発行